名前よ立って歩け

中屋幸吉遺稿集

沖縄戦後世代の軌跡

三一書房

よ立って歩け

吉遺稿集

沖縄戦後世代の軌跡

三一書房

中屋幸吉
なかやこうきち

1939年　沖縄県石川市に生まれる
1966年　琉球大学文理学部史学科卒業
同　年　沖縄中部知花城で自殺

名前よ立って歩け

1972年6月30日　第1版第1刷発行

著　者　中屋幸吉
© 中屋英忠　1972年
発行者　田川敬吾
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　山本製本所
発行所　株式会社三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電　話 03 (291) 3131～5番
振替東京 84160番
郵便番号101

0095-722031-2726

詩／名前よ立って歩け

私の名前を
小川の緑の草むらにひろげ
青空のような安心
とあそびにたわむれたい

にかよった水のながれ
いつもの通り
あくびしながらながれている
この空は
もうだれのものでもなくなった

私のすがたを残したまま
名前が後へあとへ流れてゆく
名前は
さようならと言っている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あそびが冷汗かいている
名前は
いっこうに生れず
しびれをきらした喪服は
めいわくそうに笑おうか

ふりあげてみる山
でっかいその身は空瓶のようにつっ立ち
風がふきぬけているのに身を
まかしているよ

ふあんふあんな
まいにちまいにち

目次／名前よ立って歩け

名前よ立って歩け　1

I

夜があけるまで　11

懐古（「くずてつ」より）　13

姪の死（「小説「茂都子」より）　30

II

日誌　35

I　歌をうたいたい（六一・二～十）　37

II　あまりにも沖縄人らしい僕（六二・三～九）　64

III　深みゆく喪失の季節（六四・二～九）　98

IV　政治はまだない（六四・一〇～六六・四）　141

III

詩集　201

深みゆく喪失の季節　203

夜があけるまで　205

言葉について　206

外出したら 208
青春の片隅で 211
疲れたバスの中で 213
逆説の詩(うた) 215
歌を唄いたい 218
「政治」はまだない 220
暮れの季節 222
沈黙の底辺から 223
「ボクたち」についての考察 225
貧しい時代 226
モノローグ 228
一つの終焉 230
Kへ 233
夕暮れ 236
死 238

IV 評論・断想 239

「くずてつ」第二号発刊宣言 241

「くずてつ」第三号発刊宣言　242
美しい人間愛のドラマ　244
汚れた魂　247
危機に直面する久米島闘争　251
東京オリンピック聖火の沖縄入りに現象した沖縄人の復帰意識について　256
論説　四・二八闘争は民族主義で闘われていいのか　261
生きものの記録（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）　265

V　SAYO　NARA・最後のノート　279

《一つの終焉——沖縄戦後世代の軌跡》中屋幸吉遺稿刊行委員会　297
《中屋幸吉略年譜》　318

装幀／渡辺千尋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

名前よ立って歩け

――沖縄戦後世代の軌跡――中屋幸吉遺稿集

凡例

本文の表記については、誤字、脱字、明らかな誤りはなおしたが、それ以外は、原文どおりとした。

人名は、イニシアルも含めてすべて、架空のものである。

I

夜があけるまで

懐古（創作）

不毛の珊瑚島に今次大戦の災害が一つの濁流となって波及すると、孤島の貧民は忽ち敗戦民族の汚名にまみれていった。

この終戦直後の混沌とした社会変動の空白期を巧みに捉え、阿修羅の生地獄で阿鼻叫喚として、路頭に低迷している群落の中でむくむくと活力を取り戻し、目ざましくも抬頭してきたものに戦後都市――石川がある。

過去を現実の状況として捉えることの困難さは小説家ならずとも私は知っている心算（つもり）でいる。私ははるかに隔絶してしまった時間と空間との大きなギャップの中で不透明な眼鏡越しに深淵なる古の映像を捉えてみたいと思うのであるが、十年一昔の追想が近代感覚に風靡された私の頭脳では、その色彩すら満足に描く事の困難を正直に告白しておく。

今日の都計士が口をそろえて讃辞しているように、古の整然とした区劃道路は常緑のテリハボクやフクギのうっ蒼とした喬木に囲まれて、一種の風格を放っていた。

要所要所の道角に通りを蔽うようにして威丈高に構えている榕樹（がじまる）は常夏の炎天に悩む村の人達

の唯一の休憩所であった。

常に空腹に悩まされた私は、よくこの太くてこぶだらけの大木を石段でも駈けあがるような身軽さで、スルスルとよじ登ると、枝の節間についている赤紫の実を、むさぼるように食ったものである。

私は歴代農家——石川家の、中流の家庭に、末端の次男坊として特に母の腹を痛め、晩産のオタケビをあげて生れ落ちてきたのであった。私の屋敷は二百坪の広さで、中庭の植込みには、藪竹と芭蕉木とが仲良く陣を取っていた。屋敷の周囲には、英国紳士風な長身スタイルで、二〇米もする細い軀の先端には、美味しい果托をつけた上品なイヌマキ〈チャーギ〉や印度支那ではコーヒー園の日蔭用として、又観賞用として愛用されているというセンダンが、四季の変転に美しい衣装を変えてみせた。

葉、実を食用の足しにしたシマグワ〈クワーギ〉、独特の香気を放つウチムラサキやクガニーのミカン族はある意味で私の脳裡に忘れがたい思い出を刻んでくれた。

この外、南亜細亜では、屋根葺用や壁用に用途の広い、ビロウ〈クバ〉、そしてタンミンタチバナ、ヤマアサ、ギンネム……と凡そ十数種に余る木々に我が家は息も出来ぬ程であった。この様々な木立に堂々めぐりされた私の屋敷の、一つの縮小された小社会の枠内で、私の幼児物語は誕生した理である。

四、五歳当時の記憶は落莫とし、形をなさぬシーンが摑み所もなく浮漂しているばかりである。

その中で一つ二つ、真夏の灼熱地獄の中で頭と胴との区別もつき兼ねるまでに真黒く焦がれて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com